スイス

岩波写真文庫 25

岩波写眞文庫 25　スイス

編　集　岩波書店編集部
岩波映画製作所

世界のいろいろな国を正しく知ることは、私たちの大きな課題である。しかし、一つの国を誤りなく理解することは、けっして容易なことではない。その国の風土、政治、経済などを、それぞれの関連のもとに、歴史のなかにとらえなくてはならないからである。ここに取り上げるスイスについても、じつをいうと、わが国ではあまりよく知られていない。しかも、日本は太平洋のスイスだなどと、不用意にくらべていう人もある。私たちはまずスイスの国について、いろいろな事情を知らなくてはならない。この小さな本からも、スイスがわが国と違っている、いろいろな点を見出すであろうが、忘れてならないことは(いうまでもないことだが)、スイスはスイスであって、それ以外のなにものでもないことである。もし私たちが異なった風土と歴史とを持つ一つの国から、その形だけを学ぼうとするなら、大きな誤ちをおかすことは当然であろう。

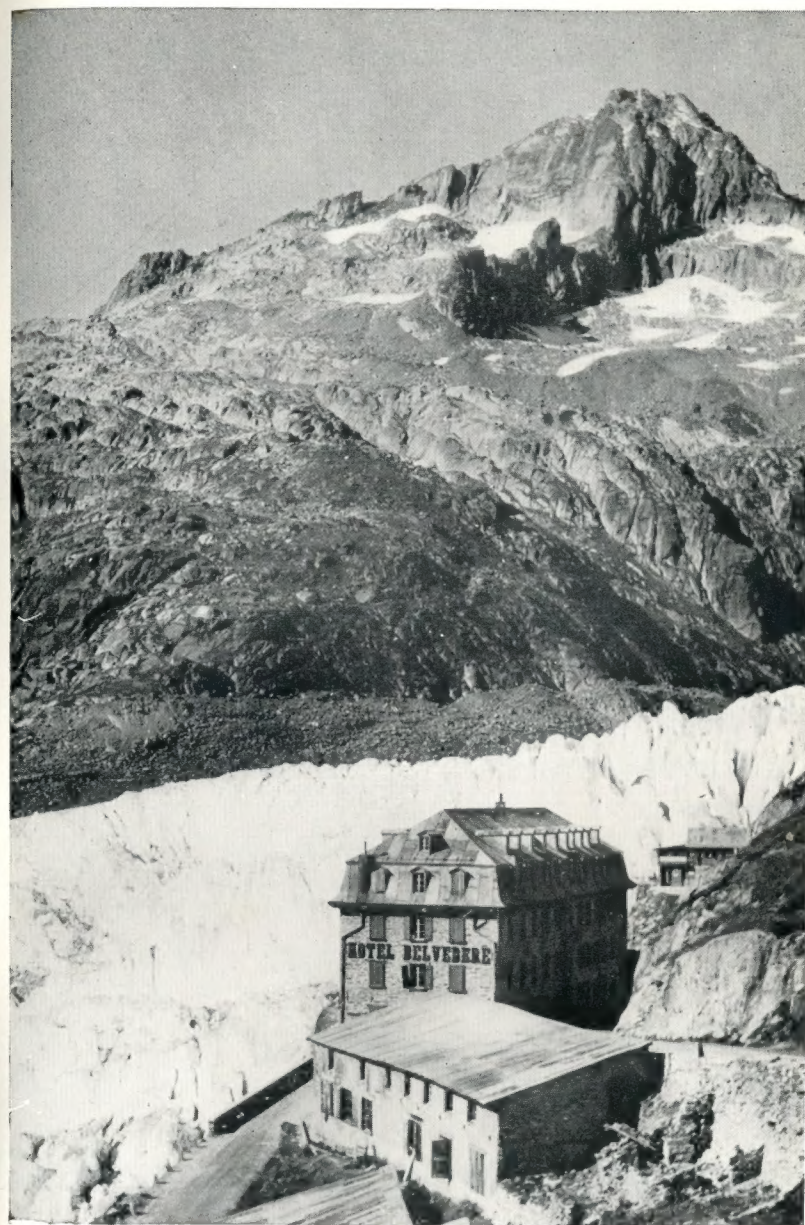
この本を作るについて、スイス連邦在日使節団ならびに同国新聞特派員ボッサルト氏の好意と援助とをうけた。おさめられた写眞の大部分は、スイスA・T・P写眞通信社提供のものである。なおスイスの美しい山や湖、その山腹にいとなまれる興味ある生活は、写眞文庫「アルプス」におさめられている。

フルカ峠(最高2436m)，そばをローヌ氷河が流れている. ➡

目　次

1. はじめに…………………… 2
2. スイスの国土……………… 4
3. 連邦の始り………………… 8
4. 徹底したデモクラシー…15
5. 守るための軍隊…………30
6. 繁　栄……………………46
7. 交通と観光………………56

定価100円 1951年3月25日第1刷発行 1957年2月20日第7刷発行 発行者 岩波雄二郎 印刷者 柳川太郎 印刷所 東京都板橋区志村町5凸版印刷株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ッ橋2/3 株式会社岩波書店

1　はじめに

ヨーロッパの国々が二度目の大戦からやっと解放されたとき、人々が見出したものは、疲弊し混乱しきったヨーロッパであった。そして、たいていの国ではうちひしがれた経済を立てなおすために、マーシャル・プランといわれるアメリカの経済援助をうけなくてはならなかった。このような中で、マーシャル・プランにもとづくアメリカの援助をうけなかった数すくない国の一つとして、ポルトガルとともにスイスの名があげられる。スイスの場合はそればかりでなく、かえってイギリスをふくむ西ヨーロッパ諸国に対して多額のクレジット（債権）をもっている、ヨーロッパでただ一つの国でもある。もちろん、戦後のインフレーションの波はスイスにも及んでいる。しかしそれは、私たち日本人が経験したような物の不足に原因するものではなかった。アメリカと同じように、金の保有量が戦後どんどん増えていったために起った種類のものである。したがって、物價が二倍近くになった程度の軽いインフレーションであった。しかも、賃金の水準は物價に応じて増えていったから、市民の生活をおびやかすほどのこともなかった。またこの国では、失業者が戦前および戦後を通じてほとんどなく、貧富の差もいちじるしくない。このようなスイスの状態は、戦後のヨーロッパでは一つの不思議とされたものだが、同時にまた、ヨーロッパの人々に大きな反省の材料を与えている事実でもある。

　現在のスイスは、ただ人々が豊かに生活しているというばかりでなく、今日の世界では忘れ去られてしまったり、失われてしまった古い習慣や伝統が、なお豊富に保存されてもいる。スイスを訪れる外国人はホテルに泊っ

バーゼルの国境標示．ここではドイツ，フランス，スイスの三国があい接している．

ている人たちが床につくまえに、自分たちの靴を部屋の外にだしておくのを見て、不思議に思ったり心配したりする。しかし翌朝になると、その靴がきれいに磨かれて、やはり同じところにおいてある。まちがっても盗まれるようなことはない。また街でも自転車が無造作にあちこちに立てかけてある。誰も乗り逃げしようなどと思ってもみないからであろう。こんなことは考えてみればごくあたりまえのことである筈なのに、現在のヨーロッパでは、一時的にせよ、失われてしまった光景なのである。いまなお美しい習慣を保ちつづけているスイスが、戦後のヨーロッパの人々に、まるでパラダイスのように見えたとしても、しごく当然なことであろう。ヨーロッパ人と、まるで人ごとのようにいったが、私たち日本人にしても、まったく同じようなことがいえよう。私たちは一応スイスを、美しい山と湖との国、赤十字の国、時計の国としては知っている。しかし、スイスにこんな一面があることは、ほとんど知られていない。日本も将來は太平洋のスイスになるのだなどと、簡單にいっている人もあるが、スイスの歴史なり人情風俗なりを、もっとよく知れば知るほど、第二のスイスになる道が、けっしてなまやさしいものではないことを知らされるのである。アルプスの山間に位するスイスは、総面積四一、二九八平方キロで、わが国の九州よりやや小さく、住民もわずか四五〇万あまりという小さな国とはいえ、さまざまな問題を投げかけているのである。

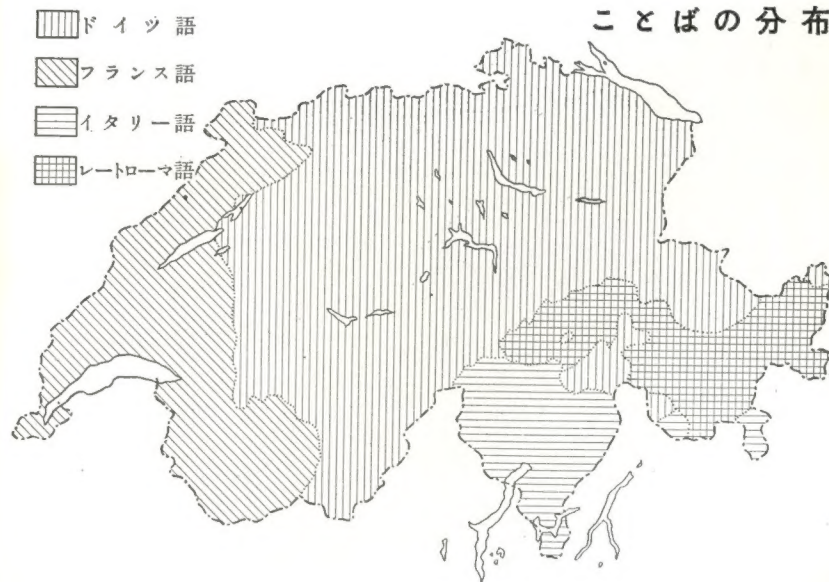
　ことに現在、平和な国としての日本を作ろうと努力している私たちにとって、自由と中立の問題は大きな關心の的であり、このようなときに改めてこのスイスという国を正しく見なおすことは、大いに意義のあることであろう。数百年もつづいているスイスの政治的、軍事的中立にしても、けっしてたやすい道を歩いて獲得したものではない。また、その将來もけっして安易なものではないであろう。スイスの中立については、この国のもつ地理的條件がひじょうに幸したということも考えられるのであるが、同じようなことが近代戰の時代に、はたしていえるかどうかは問題があろうし、「罪惡に対しての中立は正しくない」とする考えかたが、いろいろな国で支配的になればなるほど、さらに問題は複雑にからみあってくるだろう。また一面で、スイスが中立を保ちえたのは、対立するいくつかの国のあいだのバランスのためであったともいわれているのであるが、現在および将來の世界情勢のもとでは、この点についてもいろいろの問題があるのではなかろうか。

2　スイスの国土

北海に走るライン、地中海に入るローヌ、黒海にそそぐドナウは、西ヨーロッパの三つの大きな河川だが、ラインもローヌもその源をスイスの山間に見出せる。パミール高原をアジアの屋根というなら、スイスはヨーロッパの屋根である。南部を西から東北東に走るアルプス山地は中欧と南欧との境界となり、スイスに北方的なものと南方的なものとを与える。西方には、フランスとの国境にジュラ山地がのび、アルプスとともに中央高原をかこむ自然の砦となる。その高原は北東方に裾をひろげ南ドイツに連なる。このような地形と人種分布の現状とから、私たちはこの附近に行われた過去の民族移動の跡をたどることができる。古代には西北部にケルト族、山地にレート族が住んでいたが、紀元前にはローマ人の侵入があり、さらに四世紀に始まったゲルマン民族の大移動に際しては、北方からアレマネ族（ドイツ系スイス人の祖先）が河沿いに移動し、先住民を南東の山地に追ひこめた。これら先住民はレート・ローマ人といって古代ローマの文化をいまなおうけつぎ、スイス連邦はその言葉も国語の一つとして認めている。また、西方にはブルグント族（フランス系スイス人の祖先）が入り、アルプス南斜面にはイタリア人が住んでいる。このようなスイスの国を理解するために、私たちはこの国を仮に四つの部分に分けてみよう。第一はアルプスとよばれる山岳地帯、第二はアルプとよばれる牧草地帯である。アルプの谷深く部落を作る住民は牧畜を生業とし、古くからの特異な風習を残している。第三は、湖の散在する平原地帯で湖畔に都会が発達し工業がおこり、近代スイスの中心である。第四の、都会をとりまき平原全体に散らばる農村は昔ながらの面影を強く残すばかりでなく、建國以來スイスの國の筋金をなした重要な部分である。

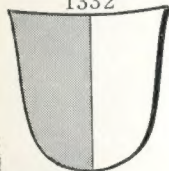
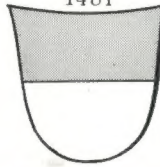
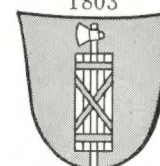
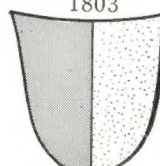
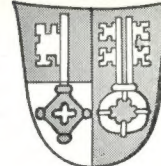
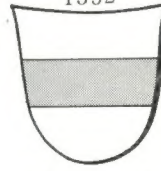
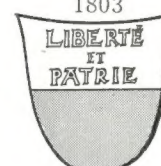
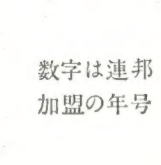
独佛二ヵ国語で書かれてある案内板

ことばの分布

スイスの地形

ユングフラウ遠望．前景は典型的なアルプ（牧草地帯）．雪がとけると，牧夫は牛や羊をつれてこのアルプに登る．人も家畜も山の上で一夏を過ごし，秋に入る頃，村へと下る．

ザンクト・ガーレン市．街路は狭いが，りっぱな家々が並んでいる．数万の人口を持つ都市としてはヨーロッパでいちばん高いところにある（669 m）．スイス刺繍工業の中心．

高度約 5000 m の機上から，マッターホルン（4505 m）とヴァイスホルン（4512 m）の北面を見る．マッターホルンはウィンパーの悲劇でも有名である．その向う側はイタリア．

サン・モリッツの冬景色．避暑地，スキー場として有名なオーベル・エンガディンの山村．落葉松の森のなかに稀世の山岳画家，ジョヴァンニ・セガンティーニの記念美術館がある．

3　連邦の始り

アルプスの麓に移住したアルマネ人は、十世紀のはじめオットー一世がヨーロッパの大部分を統一し神聖ローマ帝国を作るまで、つぎからつぎへ、いろいろな王国の支配をうけていた。しかし国としてのスイスの歴史は、ルツェルン湖畔に住むシュヴィーツ、ウリ、ニィードワルデンの部落民が共同の敵に対する永世防衛同盟を結んだ一二九一年に始まる。このころハプスブルグ王家は中央ヨーロッパに覇をとなえるために、アルプスの要衝であるこの地方をおさえようとしていた。そこで同盟の初期の活動はこれに対する反抗に集中された。戦いはハプスブルグ王家の代官と、三州の人民軍とのあいだに始まり、一三一五年のモルガルテンの戦いにオーストリア側が敗退するまで続いた。こうしてこれら三州が、スイスの最初の州（ウルカントーネ）として核となり、その周囲にだんだん新しい州が加わって、今日のスイス連邦を形づくったのである。最初に同盟に参加したのは、ルツェルン、チューリッヒ、グラールス、ツーク、ベルンの五地方であり、ここにスイスの八つの古い州といわれるものができた。それから約百年間、スイスは西ではブルグンド公、東では、いぜん野望を捨てぬオーストリアの侵入と戦わなくてはならなかった。ある時代にはアルプスを越えてイタリアに侵入し、ミラノ、ゼノアを征服するようなことさえあったが、いきおいに乗じて戦線をひろげたために、フランス軍に大敗を喫した。この外地遠征は、同盟内部での意見の相違をもたらす原因ともなり、大きな反省を与え、その後は国境を越えるようなことはなかった。しかしヨーロッパ全土を抗争の渦巻に投じた新旧キリスト教徒の対立は、スイスに対しても複雑な国内問題を生むきっかけとなった。まず州や都市のあいだの争いが起り、それが終わると今度は都市と農村との経済的対立となり、それが原因となって数度の叛乱が起るなど、連邦内部の紛争はあとを断たなかった。このような情勢に乗じて、一七九八年にはフランスからナポレオンが侵入し、その保護国として統一国家の形をとった時代もあったが、一八一五年のウィーン会議の結果、永世中立国として再出発し、この機会にさらに三州を加えて現在のスイス連邦となったのである。

数字は連邦加盟の年号

➜ 開国記念日(8月1日)にゆかりのリュトリの森に集まった人々. 1291年のこの日, この森で最初の三州の密約がとりかわされた.

↑ ライオンの記念像(ルツェルン). フランス大革命当時, チュイルリー宮殿を死守してルイ十六世を救ったスイス傭兵の記念. むかしスイス兵は, その勇武と厳正な軍紀とのゆえに外国軍隊にやとわれたが, 現在の法律は外国軍隊に入ることをかたく禁じている. ただ特例として, ローマのヴァチカン宮殿は現在でもスイス人が守備している.

↖ ウィリアムテル像(アルトドルフ). 愛児の頭上の林檎を射たという建国傳説の主人公.

↙ シオン(ヴァレー州)のとりで跡. 中世のもの. 現在でも, スイスには国境の山々をかためるため, 地下要塞などが作られている.

スイスの歴史は，ローマ時代から現代に至るまで周囲の諸国との交渉の跡をしめしている．このことはスイスに現存している建築物からもうかがわれる．あちこちに見られる各時代，各様式の建物そのものが，スイスの歴史の性格を物語っている．

➡ 右側
ローザンヌの大寺院表ロ．初期のフランス・ゴティク様式，1275 年に完成．

➡
ブリーク町の古いとりで．17 世紀のバロコ様式．タマネギ型の高い塔と中庭．

➡ 左側
ローマ時代の都市，バーゼル市には，いまもローマ風の城壁の一部が残る．

➡
とある古い修道院の礼拝堂．18 世紀のロココ様式．

➡
フリブールの，聖ニコラス大寺院．主要な部分はゴティク様式．76 mの塔は1640年に完成したもの．

4　徹底したデモクラシー

スイスは徹底した民主主義（デモクラシー）の国である。しかしそれは、一つの政治原理や外国の影響によってもたらされたものではない。スイスのデモクラシーは、山の多い美しい大自然のなかで、傳統的に自由を愛するスイス人が数百年にわたって築いてきた、実際的な社会生活の方法なのである。スイスの民主政治の形態は村落からその連合へ、州から連邦へと、長いあいだかかって蓄積されたもので自然な形で訓練されたこの国の政治はもう「技術」にまでなろうとさえしている。現在の連邦憲法がアメリカ

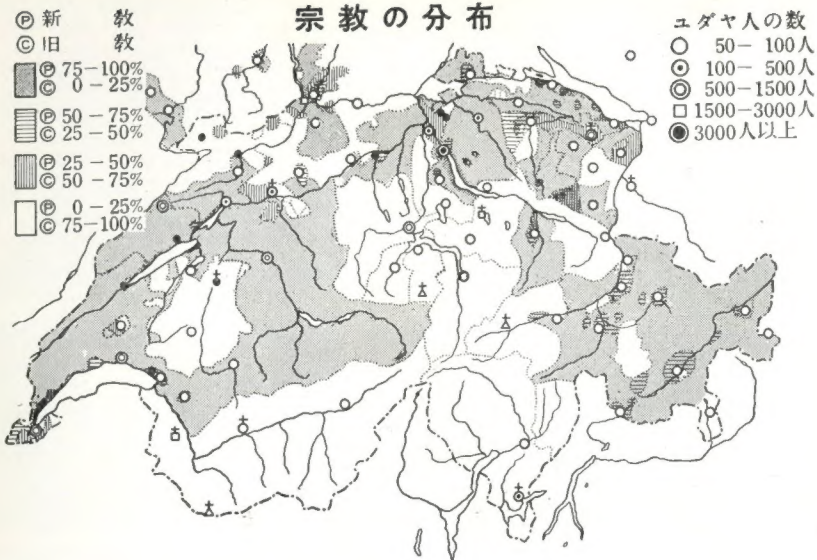
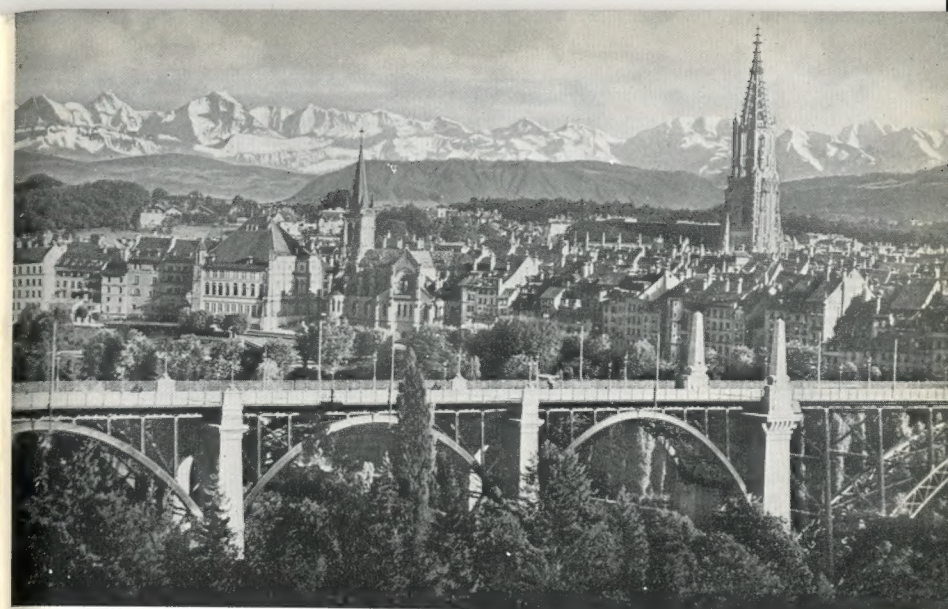
第二次大戦中のフランスとの国境

スイスの各州

シャフハウゼン
バーゼル
トゥールガウ
アールガウ
チューリッヒ
ザンクト・ガーレン
ソロトゥルン
アッペンツェール
ルツェルン
ツーク
アールガウ
ヌーシャテル
シュヴィーツ
グラールス
ベルン
ウンターワルデン
ウリー
フリブール
グラウビュンデン
ヴァート
ティチノ
ジュネーブ
ヴァレー

宗教の分布

Ⓟ新　教
Ⓒ旧　教
Ⓟ75−100%　Ⓒ0−25%
Ⓟ50−75%　Ⓒ25−50%
Ⓟ25−50%　Ⓒ50−75%
Ⓟ0−25%　Ⓒ75−100%

ユダヤ人の数
50−100人
100−500人
500−1500人
1500−3000人
3000人以上

のものを参考にして作られ、議院は二院制であるとはいえ、スイスは特異な政治形態を持っている。たとえば、政府に相当する七人の合議制による連邦参事会、参事会の構成員が一年ごとに交替してなる形式的な大統領制、自動的に翌年は大統領になる副大統領制など伝統の上に立った新しい試みがなされている。連邦にもほかの国と同様、いろいろな政党があるが、中立政策においてはほとんど一致している。フランス、ドイツ、オーストリア、イタリアなどにかこまれた小国にもかかわらず、この国の経済的安定や国民の政治気質を反映して、政情はいつも安定している。一九四七年に改選された現在の下院の議席分野を見ても、急進民主党五一（四七）、社會民主党四八（五六）、カトリック保守党四四（四二）、農民中産党二一（二三）、その他二七（二〇）、無所属一二（六）で、括弧内の一九四三年度の数にくらべ、その増減はいちじるしくない。スイスはいくつかの州からなる連邦であるので、その統一的な運営については、いつもいろいろな問題が起るが、連邦の権限を強化するか、しないかは大きな問題であり、ここ数十年間の傾向は中央集権強化の方向にむかっているようである。とはいえ、各州がいまなお、広範な自主権を持っていることはたしかである。

スイスの首府はベルンにある．しかし首府といっても，アメリカや日本の首府と違って，ただ連邦の中央政府機関があるというにすぎない．スイスの政治的中心はいぜんとして州にある．ベルンも連邦の首府としてよりは，ベルン州の首都であることのほうが，スイス人にとって，より関心がある．

↑ ベルン市．1840年に連邦首都となった．人口は約13万．いかにも落ちついた風格の古都．遠くに，アイガー，ユングフラウなどオーバーラントのアルプス連峰が見える．

→ 首都ベルンの名はドイツ語の熊（ベーレン）から転じたものとか．昔この地方には，かなりたくさん熊がいたらしい．いまもベルンのシンボルは熊で，街はずれの熊公園に飼われている．酔っぱらって，熊のオリに落ち，食べられてしまった男もいたという．

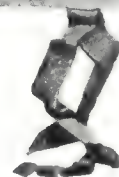
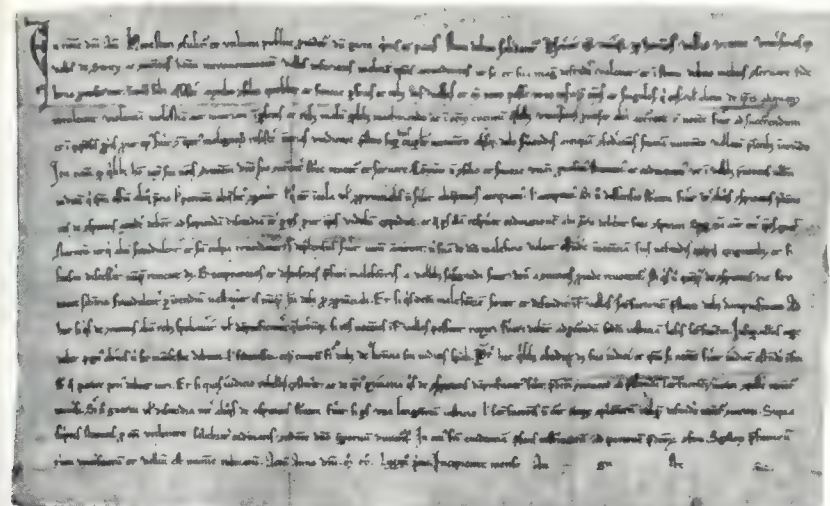
← 街に出てすぐ気がつくのは道の曲り角のさまざまな噴水である．昔のスイス兵の噴水．

提供　安田彦太郎

ベルンは 12 世紀に貴族によってアール河を見下す台地の上に開かれた都市で，その時代からの古い通りや建物があちこちに見られる．昔ながらの通りの建物には，アーケードがある．中世の人たちが歩いた道のうえを，いまは市内電車が走っている．スイスを旅行するヨーロッパの人たちが，現代から中世まで連れもどされるというのはベルンのような古い町が多いからであろう．

↑
有名な熊公園．ベルンの東のはずれにある．

→
ベルンの町並み．うしろに見える主教会は 16 世紀末に完成したもの．塔は約 100 m．

←
白壁や石造の家．特徴のある屋根．すべてが古く，セザンヌの絵をみるような美しさ．

←ベルンの連邦議会．上院の構成員は，各州2名ずつ間接投票によって選ばれた代表44名．下院の構成員は，各州から人口に応じて直接投票された議員が約200名．

↑シュヴィーツ，ウリ，ニィードワルデンの三地方の部落民たちが，かたい同盟を結んだときの誓文．現在シュヴィーツ市の博物館に，その2枚が保存されている．

カントンについて　スイスの政治を理解するには、まずカントンとよばれる州について知らなくてはならない。古いスイスは谷の村落を中心に発達したので、これら村落が連合したカントンは、今なお独立した小共和国のようなさまをしている。たとえば教育の制度にしても各カントンがそれぞれ自由に定めており、連邦下院に送る議員の選出方法も、二二、〇〇〇人に一人の割合を守るほかは自主的にさだめているほどである。したがってカントンの運営もそれぞれによってひどく異なっている。古くからある州に於ては、法律制定などの最終的な決定が、州議会ではきめられず、村落の集会での決定をまたなくてはならないことになっている。このように、スイスの政治は他の国と違って連邦政府だけを見たのではよく解らない点が少なくない。

スイスの議会

連邦の参事会は任期3年その構成員は連邦議会が全国から候補者を選んで最終的には投票によってきめる．いままでのしきたりとしては，ベルン，チュリーッヒ州からはかならず1名が選ばれ，またフランス語を話す地区から2人は選ばれる．伝統的な政治の運営．大統領の候補はその所属政党とか，その宗教とか，いろいろな要素をよく配慮して，議会がきめている．

➡ 本議会中の議事堂の内部．

➡ 新しい参事会のメンバーは議会で宣誓させられる．写眞は1950年9月14日遞信鉄道大臣に選ばれたジョセフ・エッシェル博士が宣誓しているところ．

⬅ 連邦議事堂の全景．いまの建物は50年前にできた．

⬅ 下院議員選擧の開票風景．

カントンの政治

↑

サン・ゴダルド地方のある村の村会．スイスのどんな村にも自治制がゆきわたっている．村の人がみんなで集まり，自分の村のことをきめ合う．それがスイスのデモクラシーの根源となり，スイスの政治の構成単位となる．

→

州でも立法などの重要な事項は，かならずこのような全体会議にかけられる．それではじめて決定という段取りになる．グラールスの屋外での州会．

↑

アルトドルフの全体会議．台上の有権者はみな討論に参加する．この町から選ばれている代表者たちは，まんなかで報告や提案をやり，賛否を全体に問う．このような集会には，平均して，有権者の半数以上が集まるという

←

スイスの初めの三州はことにスイスデモクラシーの中心地．州会は形式的な儀式でなく，政治に参加する伝統的な核．アッペンツェールの屋外州会．

白十字と赤十字　昔から戰爭は、多くの勇ましい物語りや、壮烈な英雄を生んでいるが、一方では、戰いに傷つき、誰にも知られずに倒れていった数多くの犠牲者を残している。その悲惨さは、戰爭が近代化し、破壊力の大きな兵器が使われるにつれて、ますます増大し、たとえ非戰鬪員といえども、これから逃れるわけにはいかない。このようななかで、戰時には敵味方の区別なく、傷病者や罹災者の救護に当たり、平時には、国境を越えて困窮者に温かい手をさしのべる万国赤十字の組織と活動とは、不幸のなかにもわずかに見出す一すじの光であり、希望でもあろう。スイスは国際赤十字運動の生まれた土地として、また、その活動の中心地として知られている。一八五九年、スイスの商人アンリ・ジュナンがこの国際的聖業の運動を高唱してから、四年後の一八六三年にはヨーロッパ十六カ国の代表がジュネーブに集まり、国際協議会を開き、その翌年にはそのための條約も結ばれ、国際赤十字運動は、はじめてその軌道に乗ったのである。万国赤十字の国際委員会がスイスにおかれ、その旗も赤字に白十字のスイスの国旗を逆にした、白地に赤十字であるなど、赤十字とスイスとは離れがたい関係にあるが、これはスイスの国の性格が、このような運動の中心にふさわしいと認められたからであろう。

スイスは第一次，第二次大戰ともに中立を維持し赤十字も十分にその機能を発揮した．戰時中，赤十字の国際委員会中央事務局では，数百人の事務員たちが，何千万という捕虜のために働いていた．

捕虜の人名カードは中央事務局に国籍と名前べつに整理してある．どこにいても，ここを通じて家庭と通信できる．通信は暗号化を防ぐため，カードに印刷した簡單な文章のどれかに，印をつければよいようになっている．

MARTIN（マルティン）という名のカードが，壁一面につまっている．イギリスにもアメリカにもまたフランスにも同じ綴りの人がいるからである．

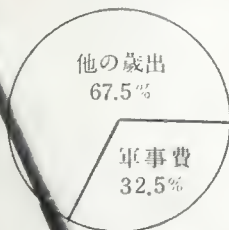
赤十字国際委員会の貨物列車，遠い収容所へと生活必需品が運ばれてゆく．

➡ 右側
ヴィールの赤十字国際委員会倉庫，おびただしい衣類や靴があつめられた．

➡
人によっては歯も生活必需品である．寄贈の古い入れ歯を集めては，分解し，改造し，注文の口の型にあわせて，送りだす．

➡ 左側
国際委員会あてに贈られてきたものは，みなきれいに洗濯され，つくろわれ，いつでも収容所に送れるように整理してある．（ヴィールにある大倉庫）．

➡
戦場では眼鏡をなくすことも多いだろう．赤十字では，眼鏡の玉も集めて整理してある．眼鏡をなくした兵士たちへの贈物．

⬅
スイスの国際援助の仕事は，赤十字だけに限らない．スイスの国も，国民も，避難民や戦争孤児の世話をすすんでひきうけ赤十字に協力する．この写眞の孤兒たちは，イタリアからチューリッヒにきた孤兒（上）も，ポーランドからきた孤兒（下）もこの平和な国で，新しい両親の手にむかえられる．

5 守るための軍隊

スイス人は、自由であるがためにはしっかりした軍備が必要だと信じている。スイス連邦もその自由と平和のために自衛力を備えている。しかしスイスの軍隊はいわば民兵といったもので、特殊な伝統をもつこの国に於て初めてなし得る珍しい軍事制度をとっている。最大動員数八〇万という軍事力も非常時に限られ、常備兵力としては、わずか新兵教育のための士官が数百人いるだけである。しかもその大部分はいつも軍務についているわけでなく、軍務に専念しているのは軍団長と師団長だけである。連邦議会は非常時にはじめて軍司令官を選び、平時は「将軍」とよばれる階級の軍人はいない。スイスの軍隊の性格は守るためのもので、けっして攻めるためのものではない。その訓練も兵器も防禦に重点がおかれ、たとえば、空軍は戦闘機を主としており、戦車も近代戦の防禦兵器として有用だと結論されてからはじめて使用された。このような方法で国を防衛するために、スイスは徹底した国民皆兵制をとっている。不具者以外の男は二〇歳になると、約四カ月の新兵教育をうけ、その後は毎年、短期間ずつ射撃とか戦闘訓練のためにわずかの期間召集され、三二歳までに延べ一カ年の軍隊教育をうける。士官は兵よりこの種の訓練が多いだけのことである。スイスの中立がいままで保たれてきたのは、国際情勢とスイスの地理的条件とのためだけだと考えられがちであるが、実際には、その軍事力もあずかって力があったといわれている。現に、第二次大戦の初期に当たって、ドイツ軍はスイスを通ってフランスのリヨンにぬけ、フランス軍主力を包囲しようと計ったが当然、スイス軍の相当な抵抗を覚悟せざるをえなかったので、比較的抵抗の少ないとみられたベルギー、オランダ方面を選んだという。その後もドイツは、スイスに対してイタリアに通ずる鉄道の管理権を要求したが、スイスの徹底抗戦の決意と、万一の場合にはスイスが鉄道の生命であるアルプスのトンネルまで破壊する覚悟がみられたので、ついに断念したといわれる。しかし、このようなスイスの軍備が、その中立と平和に果してきた歴史的事実にもかかわらず、現在のような世界情勢のなかでは、仮に新しい戦争が起った場合同じことがくりかえされるとは断言できないだろう。

カンデルの鉄橋を走るアルプス越えの列車.
この線には，20 kmの長いトンネルがある.

スイスの軍隊

スイスの軍隊が守る軍隊であって，攻める軍隊でないことは，その訓練にも現われている．戦闘訓練は廣い平原などを想定しない．国境附近の地下要塞や，山岳地帯に侵入する敵を迎撃することが訓練の重点になっている．

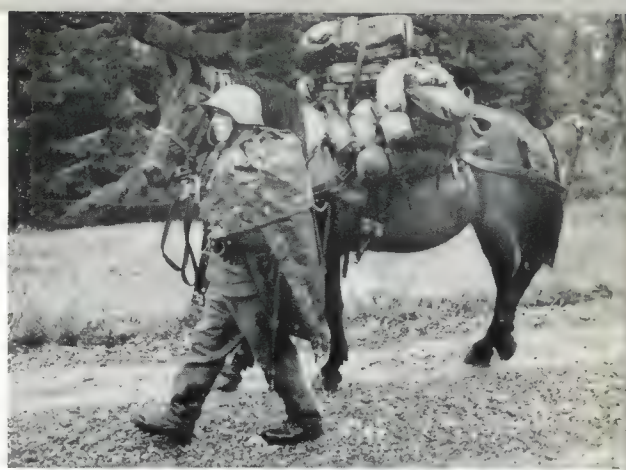
機械化部隊が動かせないような地帯も少なくないスイスでは，いまだに馬が軍用につかわれている．

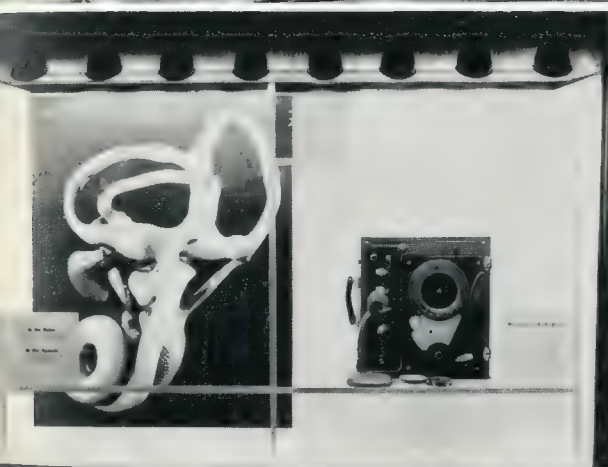
山岳地帯を行進しているスキー部隊の精鋭．スイス軍スキー部隊はその優秀なことで知られている．

通信兵器をもつスキー部隊．スイスの軍隊にもレーダーなどの新しい無線兵器がゆきわたっている．

岩場で特別な訓練をうけるスイス兵．山岳戦には平地では考えられない技能と体力とが要求される．

↑ スイスの兵士は新兵の教育が終わると小銃を家にもって帰ることになっている．家庭にいるときでも自由に射撃の練習ができるわけで，日曜日などは全国いたるところで射撃の音が聞かれる．国際射撃競技でも，スイス選手の腕前には定評がある．

→ 兵役に服しているスイス人は，貸與された軽装備をみんな家にもって帰って，大切に保管している．いつでもすぐ役に立つよう，手入にも余念がない．

↑ 機械化部隊はどこでも使えるというわけではない しかし，軍の機械化はできるかぎりの範囲で進められており，1950 年までに一応，完成したともいわれる．機械化を促進するため，ジープも民間に拂い下げられた．スイス人はそれを平時は武器としてではなく使い，非常の時には軍用に供する．

← 装備が家においてあるから，家から武装して応召する．スイス軍の動員の早いことは世界一である．

市 民 の 生 活

スイスも軍備に力をいれているが，軍国主義の国ではない．市民の生活はどちらかといえば保守的だが明かるく自由である．

→
チューリッヒの室外ダンスパーティ．室外のダンスは婦人会からお叱りもうけるが，強制的に禁止されるようなことはない．

→
一戸建て市民住宅の代表的なもの．質素な建物だが，とても便利につくられている．これは有名な自転車選手，フェルディナンド・キュブラーの家．

↑
動物園でゾウと遊ぶ子供．

←
チューリッヒ目ぬきの商店街，バーンホーフ通りに並ぶ商品は，パリやロンドンにひけをとらない．

フラウ・ムンスター教会からリマート河のムンスター橋を見下す．リマート河はチューリッヒ湖より流れだし，市を南から北へと縦断して走っている．ライン河の支流の一つ．

バーンホーフ通りの花賣り女．パラソルの上に見える布に夜間騒音の取締り宣伝文．この町にはドイツ系スイス人が多く，スイスのなかで南ドイツの空気が感じられるところ．

偉大な教育家ペスタロッチ(1746～1827)を生んだチューリッヒは，スイス学術の中心でもある．写眞は，その学術の伝統をほこるチューリッヒ大学．ノーベル化學賞受賞者，カーレル教授や，太陽黒点の研究で有名なウォルフ教授などを輩出，アインシュタインもここの員外教授だったことがある．スイスにはこのほか七つの綜合大学がありペスタロッチから流れる伝統は，教育の理論的学説にも実際的施設にも，すぐれた成果をあげている　1874年の立法によって初等教育は義務とされ，無月謝なることが定められた．しかしその学制は各州が自主的に決めるのであるから年限などもまちまちて，6年制の州もあり9年制の州もある

中央郵便局　近代的な設備　郵便物はいっさい自動的に，チューリッヒ駅へ運ばれる

チューリッヒはベルンとは対照的なスイスの代表的な都会である．スイスの東部にはその地形上の関係で，商工業を中心とする都市が発達している．チューリッヒもまた織物，機械工業，化学工業などがさかんな工業都市として知られる．人口37万をこえるスイス最大の都市．街は近代的な美しさに溢れ，ドイツ語が話されている．同じ国境に近いにしても，バーゼルよりずっとドイツに似て，ちょうどジュネーブがぜんぜんフランス風なのと同じような感じである．

チューリッヒのバーンホーフ通り，駅前通りという意味である．1.2キロもつづくにぎやかな商店街．市内電車はチューリッヒでも，主な交通機関の一つだが，御多分にもれず，交通のはげしい場所ではかえって障害になり，市当局の頭をなやましている．

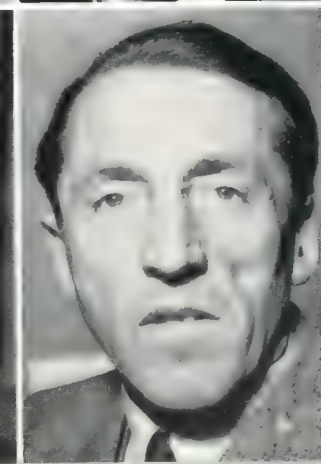
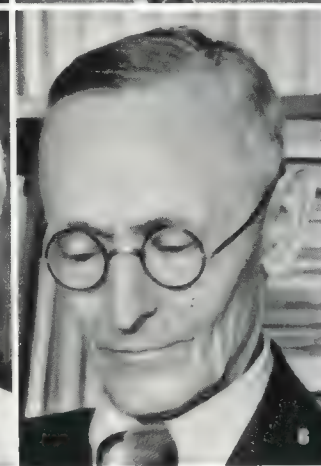
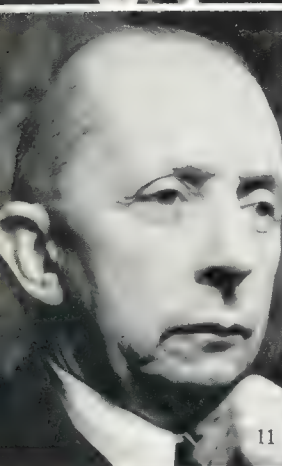
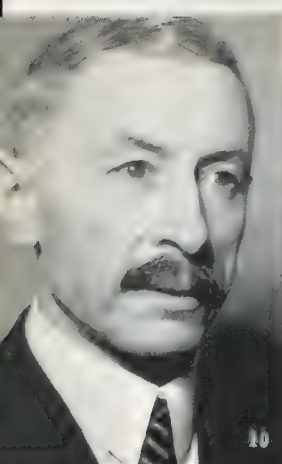
1) パウル・J・リューゲル氏(1897～　). 赤十字の国際委員会委員長.

2) ゴットリーブ・ドゥットワイレル氏(1888～　). スイス一流の実業家. 下院議員, チューリッヒ下院議員などを歴任す.

3) H・C・フリッツ・ワーレン博士(1883～　) 農学者. 第二次大戦中の輸入杜絶に当たり国土開発に多くの功労があった.

4) エドゥアルト・フォン・シュタイゲル博士(1881～　). ベルンに生まる. 1951年度の連邦大統領. 法律学を専攻す.

5) アンリ・ギーザン将軍(1874～　). 第二次大戦当時の連邦軍司令官. ナチス・ドイツの強圧に抗して, スイスの中立を守った功績は有名である.

6) アルトゥール・オネッゲル氏(1892～1955). パリに住む世界一流の作曲家. 現代フランス音楽の「6人組」の1人. 作品「ダヴィデ王」「夏の田園」などは有名である.

7) パウル・ミュラー博士(1899～　). 化学者. DDTの発明者. 1948年度ノーベル医学賞を受く.

8) ヘルマン・ヘッセ氏(1877～　). 世界的な作家. 南ドイツに生まれ第一次大戦後スイスに移住. 現在はスイス国籍をもち, ルガノ湖畔, モンタニューラーの丘に住む.

9) パウル・シェラー博士(1890～　). 原子物理学者. チューリッヒ連邦工科大学物理研究所長.

10) パウル・カーレル博士(1899～　). ビタミンの構造を明らかにした化学者. チューリッヒ大学化学研究所長. 1937年度ノーベル化学賞を受く.

11) フレデリック・ゴンザック・ドゥ・レノー氏(1880～　). 現代スイス一流といわれる文学者.

12) ウイリアム・ラパール博士(1883～　). 経済学者. ニューヨークに生まる. 国際的協力事業で有名. 1946年, 国際連合のオブザーバーとなる.

6 繁栄

スイスの繁栄はめぐまれた風土によって、自然にもたらされたものではない。美しくはあるが、天然の資源に乏しい、農耕地も少ない、そんな貧しい国土の上に、スイス人の努力が築きあげたものである。自然の悪条件にも負けず、環境をたくみに利用しつつ、長いあいだ働いてきた。その成果が現在の繁栄である。したがって現在の繁栄に達するためには、スイスの政治もいっしょに歩調をあわせてきた。一八六四年にヨーロッパではじめて労働者保護の法律を作ったのもスイスであり、一八七七年に世界に先がけて工場法を制定したのもスイスであった。また、その中立政策もスイス経済の発展を助けている。けれども、スイス経済は国際経済にその大半を依存しているので、第一次大戦後に見られるような苦しい経験も積んでいる。一九一八年の全鉄道従業員のゼネスト、一九二二年の一三万の失業者など、繁栄への道はけっして平坦なものではなかった。スイスは早くから農業に依存する方針を捨て、工業に重点をおき、現在ではイギリス、ベルギーとともに、ヨーロッパの有数な工業国の一つである。農業に従事するものは全人口の二割にすぎず、食糧は国内需要量の半分をみたす程度で、大半は外国からの輸入によってまかなわれている。一方、畜産業は広大なアルプスの山腹を活用して盛んに行なわれているが、なかにはやはり輸入しないと間にあわないものもある。鉱物資源も少ない。そこで工業の動力源としては、雨が多く山地の多い点を利用して水力発電に力を入れ、スイス工業の発展のために大きな力となっている。スイスの工業の重点は他の工業国に見られるような大企業による重工業にはなく、主として中小企業経済にもとづく精密機械、紡績、製紙、タバコ、加工食料品、化學工業などの軽工業にある。これら軽工業は、第二次大戦中、原料の輸入に困難をきたし一時的にその生産が落ちたとはいえ、現在はすでに戦前を上廻る生産をあげ順調に発展をつづけている。ことに時計工業は、電気機械やディーゼル機関と並んで世界的に有名で、全国製造工場中、時計工場は一割弱をしめ、その製品の約九五%は輸出されている。時計に限らず、スイスの工業はどれも輸出向けが多く、大半は外国へ送られ、観光事業関係の収入と共にスイス経済の支柱をなしている。

産業の分布

機械 時計 綿織物 絹織物 毛織物 刺繡 帽子 化学工業 乳製品 靴 チョコレート 人造繊維 水力発電 E 鉄 S 塩 Al アルミ

時計とチョコレート

1) 世界的に有名な，ヴィールのオメガ時計工場.

2) 婦人も働いているが高度の精密作業は男子工.

3) 時計の精密部品は顕微鏡や擴大鏡で組立てる.

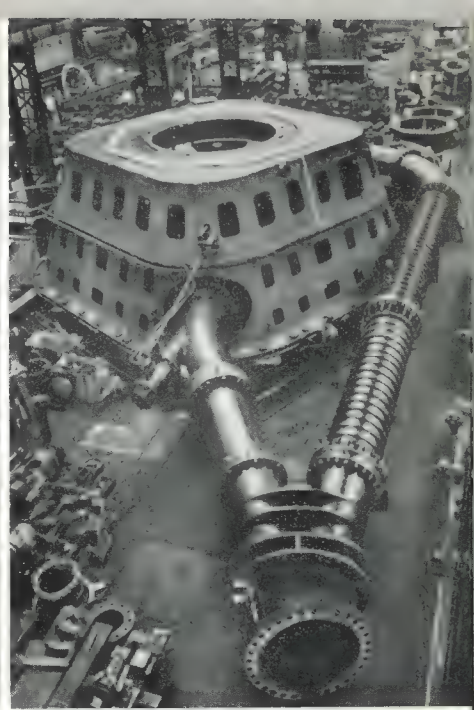
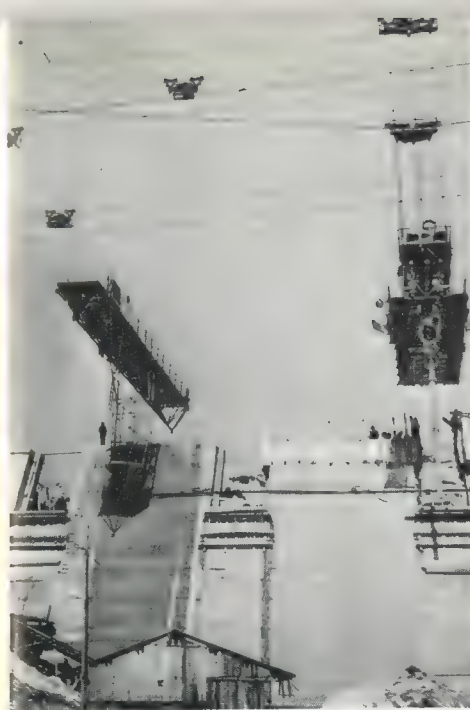
4) 時計のヒゲゼンマイの長さをきめている職工.

5) 三代つづいた時計技師の家もめずらしくない.

6) 下の小さな目盛り盤が動いて，月齢が現われる時計. ホイエル会社製.

7) 近代的なスシャールのチョコレート工場の寸景. ヌーシャテルにある.

8) 機械から流れだしてくる，チョコレートの帯.

9) チョコレート包装工場 機械化した流れ作業.

スイス工業の支柱

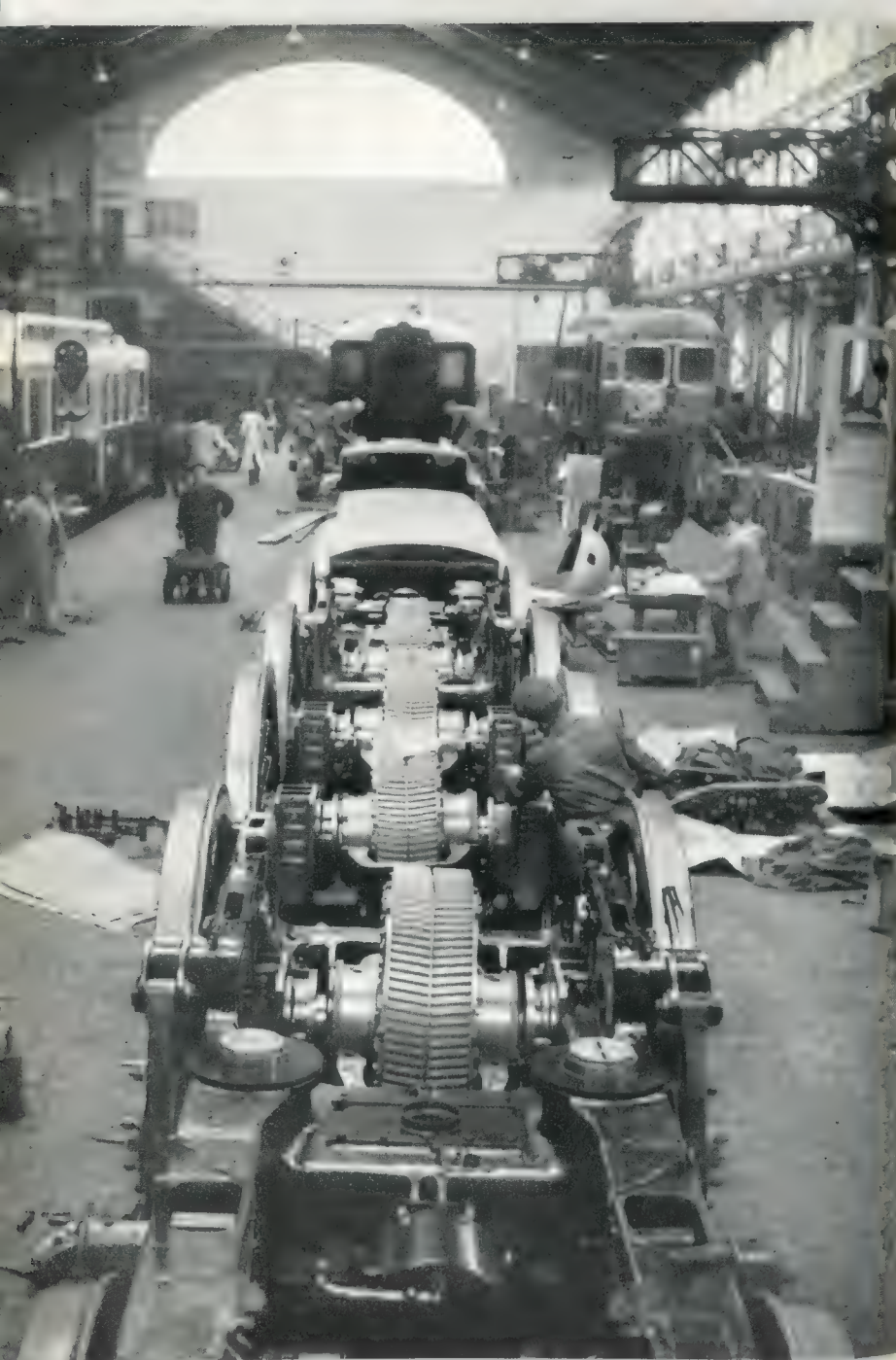
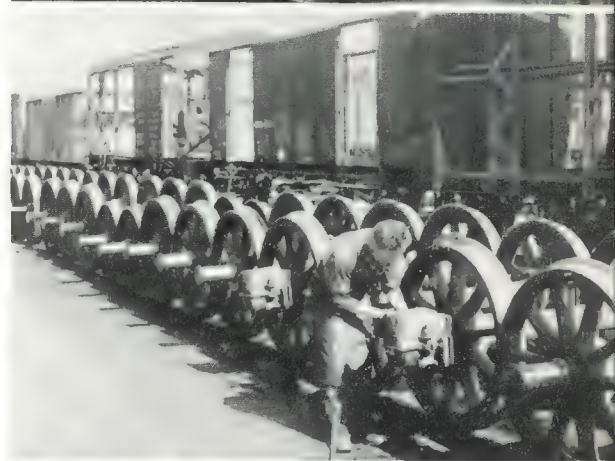
水力発電はスイス工業の原動力である．いまなおどしどし発電所が新設されるほど，電力の需要は多い．第二次大戦中，煖房用の石炭が不足したので，各家庭で電熱器を使おうとしたが，さすがそこまでは電力が十分でなかった，という挿話もあった．

↗ チューリッヒの大きな機械工場．組立中の発電用タービン．58400馬力．

➡ エグリザウの発電所(チューリッヒ)．

↑ 後から後からつづく新発電所の建設．

← グリムゼル貯水池(ベルナー・オーバーランド)．スイス近代工業の支柱．

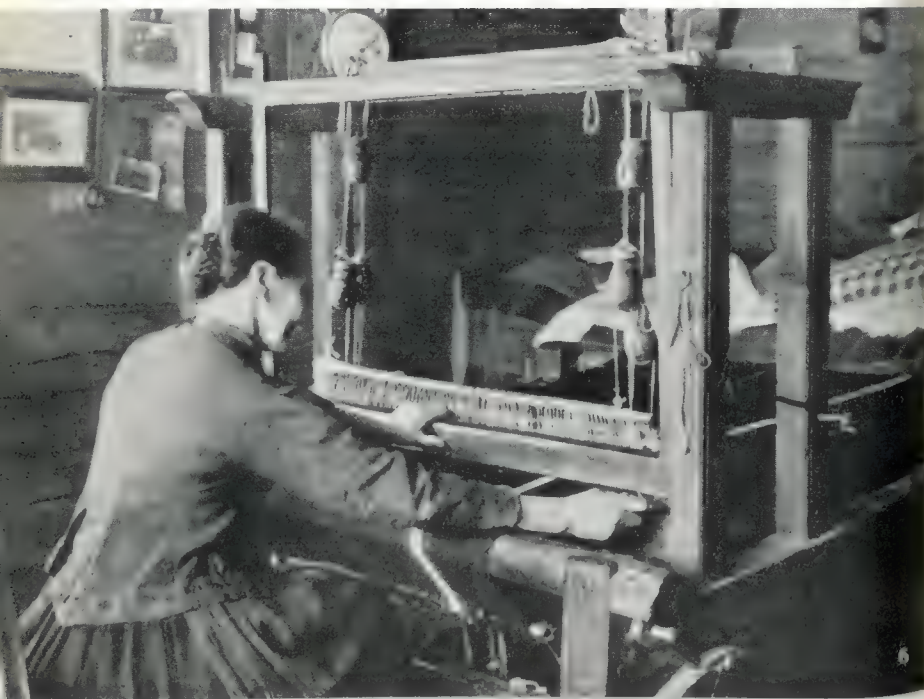
スイスの車輌工業

車輌工業は，時計工業とともに，スイス機械産業の雄である．その車輌は国内の需要をまかなうばかりではなく，外国へもどんどん輸出されている．

→シンドラー車輌工場の製図室，新型車輌を設計する，優秀な頭脳スタッフ．

→古い貨車が分解され新しいものに改造されている．

→同じ工場の一部では，軽金属ボディのスマートな快速列車が組み立てられてゆく．左側の奥がその快速列車．手前のものはチューリッヒの市内電車．

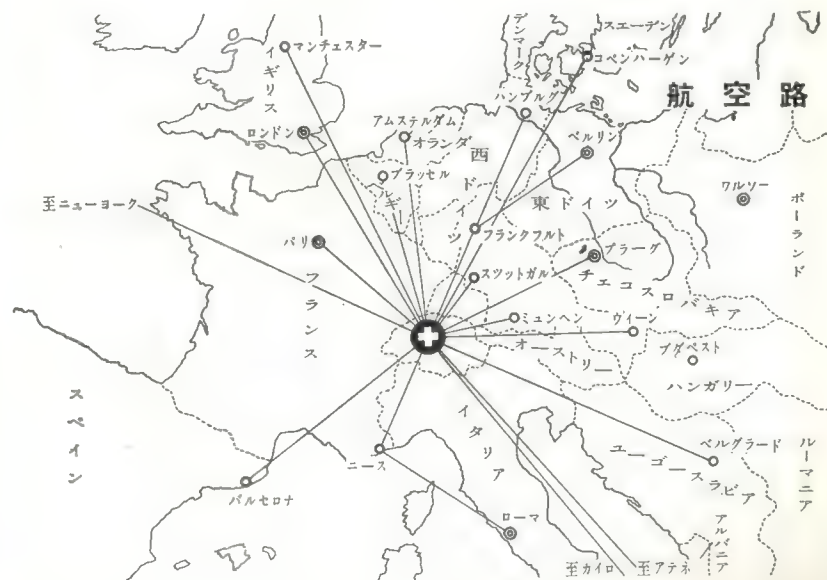
←チューリッヒ州，ウィンタートゥールの機関車工場．組立工場．電気機関車の車輪．減速歯車．アルプス越えの車だろうか．

スイスの手工業

1) テッシン州特産のサンダル(ツォコリ).
2) 特製の牧夫帽. もともとアルプの牧夫たちがかぶっていた帽子を商品化したもの
3) ザンクト・ガーレン州の刺繍. 近ごろ技術者が減り, 政府で保護奨励をしている.
4) 観光地の俗悪な土産品に対抗して, 工芸家たちがつくった新しい土産品. 布人形.
5) 芸術味ゆたかな木彫. これは百姓の女. 枝などを巧みに利用した素朴に美しい刀痕.
6) ヴァリス(ヴァレー)州ザースの, 機織.

7 交通と観光

昔のスイスを旅行した人は例外なく、その美しい風光をほめそやしたが同時に旅行の困難さには閉口したものらしい。しかし、スイスはもともとアルプス越えの交通の要衝として発達した国なので、交通については国としても大いに力をつくしている。現在ではその複雑な地形を克服して世界でも有数な交通、通信の便利な国となっており、鉄道は三六四五マイル敷設され、世界一の密度をもっている。また電化が進んでいて蒸気機関車はほとんど見られぬこと、登山鉄道の発達していること、アルプス越えのシンプロン・トンネル（約二〇キロ）などの長いトンネルがあることなどで有名である。道路は昔からよく開けていたが、自動車の増加とともにりっぱにされ、自動車旅行も便利になっている。国内いたるところにある多くの美しい湖水には、瀟洒な船が浮かんでいて、観光客を運んでいる。さらに航空路も、戦前すでに一年間の飛行距離が延べ二二〇万マイルを記録するなど、早くから開発され、スイスと外国

航空路

マンチェスター
イギリス
ロンドン
アムステルダム
オランダ
ブラッセル
ベルギー
西ドイツ
ハンブルグ
デンマーク
コペンハーゲン
スエーデン
ベルリン
東ドイツ
ワルソー
ポーランド
至ニューヨーク
パリ
フランス
フランクフルト
プラーグ
スツットガルト
チェコスロバキア
ミュンヘン
ウィーン
オーストリー
ブダペスト
ハンガリー
スペイン
イタリア
ニース
バルセロナ
ローマ
ベルグラード
ユーゴースラビア
ルーマニア
アルバニア
至カイロ
至アテネ

との交通に一役買っている。このように快適で、便利な交通網は、天與の美しい風光や、ヨーロッパの中央に位置する好条件、ドイツ語、フランス語、イタリア語、英語がどこへいっても通用するという人種的条件とあいまって、観光事業をいっそう促進し、「観光産業」という言葉が使われるくらい、スイス経済の大きな部門になっている。いったいスイスは国際貿易に依存している国で、輸入超過のために貿易上の赤字は毎年かなりの額にのぼるが、それを観光収入で補塡してしまうほど、「観光産業」の比重は大きい。外国からの観光客は第二次大戦の勃發で一時いちじるしく減少したが、終戦後はふたたび活況を呈し、現在では、戦前の状態に近づきつつあるという。しかも興味をひくことは、国内の旅行者が戦前にくらべてぐっと増加したことで、スイスの生活水準が戦後かえって楽になってきている一つの証拠であろう。これらの観光客群を迎えるために、スイスのホテルは完備状態に近く、数千のホテルは、総計二〇万近くの収容力をもっている。

発達した交通網

→スイス上空を飛ぶダグラスＤＣ4．スイスエヤーラインの定期旅客機．航空機は国内では製造しないので，みな外国からの輸入．

↑ベルン－シンプロン線の軽快な電車．スイスの鉄道は最新式に設備されているが，使用している機関車，客車，その他の車輌はいっさい国産品ばかり．スイスでは車輌も清潔に整備して，観光に気をくばっている．

←ライン河に面するバーゼル市の波止場，近代的な設備がととのっている河港としてはヨーロッパでも大きなものの一つであろう．ライン河はスイスの貿易に大きな役割りをはたしている．河口から入った船舶は，この波止場までライン河をさかのぼってくる．

ピラトゥスのクルム・ホテル(海抜 2070 m). スイスには観光客が気がるに高いところまでゆける設備がある. ユングフラウでは海抜 3457 m の場所に停車場やホテルがある.

観光スイス

ルガノの町. アルプスを南にぬけると, 気候は急に温暖になる. 青くすんだ湖. 岸にせまる山. 観光客によろこばれるところ. 同じスイスの中でもここはもうイタリア語だ.

ルガノの街. つよい日光のもとで, 人々はコーヒーの香りを楽しんでいる.

ヨーロッパやアメリカの名士たちのなかにも, スイスびいきは少なくない. 右写眞は, スイスの子供たちと遊ぶイギリスのモントゴメリー將軍. 彼は冬休みになると, きまって, グスタートを訪れる. 左写眞はチューリッヒの街を散歩するアメリカ共和党の領袖, トーマス・デューイ氏と, その夫人.

伝統のスポーツ

⬆ スイスめぐり自転車競走の一齣. これは毎年恒例の国民競技の一つである.

➡ 旗投げの競技. アルプスのヨーデル歌祭りの一部. 連邦全体のヨーデル祭も4年ごとに行われている.

➡ スイスにはつきもののアルプホルン. 4m もある.

➡ スイスの伝統的スポーツシュウィンゲン(スイス角力). ズボンかバンドをつかんで相手を倒す. そのとき手を放しては反則.

⬅ シュウィンゲンの大会風景. 大会で2年つづけて優勝すると, シュウィンゲン王の名前が得られる.

岩波写真文庫目録

1 木綿
2 昆虫
3 南氷洋の捕鯨
4 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19 川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大佛
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 佛像
43 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47 東京—大都会の顔—
48 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65 ソヴェト連邦
66 能
67 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 廣島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97 システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105 宗達
106 飛驒・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 雅楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 佛教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曾
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本
—1955年10月8日—
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ルーヴル美術館
206 ブラジル
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本
—1956年8月15日—
210 富山県

新刊

211

212

213

近刊

空からみた京都
愛知県—新風土記—
世界の人形

B6判 64頁 写真平均200枚 定価 各100円